慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾大学日吉キャンパスにおける私のドイツ語教育
Sub Title	Mein Deutschunterricht auf dem Hiyoshi-Campus der Keio-Universität
Author	境, 一三(Sakai, Kazumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.62 (2022.) ,p.13- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	境一三教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kazumi Sakai
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20220331-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

慶應義塾大学日吉キャンパスにおける私のドイツ語教育

境　　一　三

1. はじめに

私は 1997 年，40 歳の時に慶應義塾大学経済学部のドイツ語担当者として日吉キャンパスに赴任しました。それから瞬く間に 25 年が過ぎ，2022 年 3 月末に定年退職します。これを機に，来し方を振り返り，私がどのようなドイツ語の授業をしてきたのかを記しておきたいと思います。ドイツ語を教えている時が最も充実した時間であり，最も私らしく生きていると感じて来ましたので，私がどのようなドイツ語教育を行ってきたかを記述することは，取りも直さず私の四半世紀の生を描くことになると思います。

2. 経済学部 1 年生未習クラス

2.1. 経済学部の必修コマ数と担当者について

経済学部の学則では，第二外国語は 1 年次に 3 コマ，2 年次に 1 コマを履修することになっています。（私が日吉に赴任した 1997 年当時，2 年次は 2 コマが必修で，合計 5 コマ 10 単位でしたが，その後 2 年次は 1 コマに減りました。）

1991 年の大学設置基準の大綱化以来，多くの大学・学部で第二外国語のコマ数削減，甚だしくは第二外国語の廃止が行われましたが，経済学部

で第二外国語必修選択合計 8 単位（大綱化前の標準的単位数）を維持しているのは，非常にありがたいことだと思っています。特に 1 年次に 3 コマもあることにより，かなり充実した初級の授業を展開することができます。言語は，特に初級の内に集中的に学習することが最も効果的であるからです。

経済学部では，3 コマのうち 2 コマは専任者が担当し，残りの 1 コマは非常勤講師が担当しています。伝統的に，専任者が初級文法の教科書で文法を教え，非常勤講師が購読他の総合的な授業を運営するということが暗黙の了解となっています。つまり，カリキュラムは基本的に文法シラバスで組まれているのです。それによれば，専任者である私は文法を 2 コマ担当することになりますが，概念・機能シラバスを言語教育の基本であると捉えている私は，赴任初年度から文法教科書は用いず，ドイツで出版された communicative な教科書を用いて授業をしてきました。

また，はじめのうちは，事情が分からなかったことから，非常勤の先生との協働ができませんでしたが，数年経って二人の教員が別々の教科書で異なる考え方・教育方針で教えることは，学生にとって混乱の元になり，学習効果も上がらないと考えて，当時非常勤で来られていた鷲巣由美子さんにお願いして，同一教科書を二人で用いて週 3 コマを回すというやり方に切り替えました。鷲巣さんが退職されてからは，三ツ石祐子さんにお願いして，今日にいたります。

2.2. 教科書の変遷と授業言語

教科書としては，これまで *Themen neu*，*Tangram*，*Schritte international*，*Menschen* を使ってきました。どれも国際的に定評のある優れた教科書です。鷲巣さんとは *Tangram* と *Schritte international* を，三ツ石さんとは *Schritte international* と *Menschen* を使ってきました。*Tangram* は，教科書分析をしてその優秀性に気づいたために採用したのですが，次第に私たちの学習者にとっての難しさも明らかになってきました。学習開始から半

年程度は問題ないのですが，途中から進度が急に速くなり，学生が呻吟するのを目にして，数年で *Schritte international* に切り替えました。*Schritte international* は文字どおり，一歩一歩ゆるやかに進み，途中できつくなることはなかったので，長期間使用することになりました。

しかし，全てのものがそうですが，この教材もだんだんと古さが目についてきたために，他の教材を探したところ，*Menschen* に行き着きました。*Menschen* を使い始めて，これがいかに今日の DaF 研究の成果の上にできているかが良く分かりました[1)]。課題相互が綿密に連関し合って，学生のドイツ語力をうまく伸ばすようにできているのが，使うにつれて明らかになっていきました。これまで使ってきた教材もすばらしいと思ったのですが，これは私たちには非常に使いやすく，また学生の反応も良いので，授業運営がとてもスムーズに行きました。もちろん，ドイツ製の教科書に一般的な open-ended な課題も多く，これが学生の考える力を引き出すことに力を発揮していることを感じます。また，今日的な教材では一般的ですが，題材がドイツだけでなく，オーストリア，スイスからも取られていて，ドイツ語圏内の多様性に触れるという点でも配慮が行き届いていると思います[2)]。

私たちの経験では，このようなドイツ製の教材を使うことによって，ゼロ初心者の段階から聴き・話し・読み・書く訓練を積み重ねることになりますので，1 年間で話す力も（spoken production / spoken interaction の力も含めて）総合的に力が着いていくのがはっきりと見て取れます。CEFR[3)] の「共通参照レベル」に照らせば，A1 のレベルに達するに過ぎないのですが，しかしほとんどの学生が満遍なく力をつけていることは間違

1）残念ながら，日本で出版されている教材のほとんどは，言語教育研究・学習科学という学問の成果に裏打ちされておらず，見劣りがします。

2）授業では，私の研究調査地であるルクセンブルク，アルザス，南チロルについても適宜話をしました。

3）Council of Europe, *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*.

いありません。私たちの授業では，日本的なカリキュラムを採用していないにもかかわらず，ドイツ語検定を 1 年生の秋に受けた学生で，4 級に落ちたものは今まで皆無です。また 3 級の合格率も（正確な記録は残っていないものの）50％は下らないと思います。

また，1 年次に私たちに習い，3・4 年次まで学習を継続した者の中からは，学部在学中に Goethe-Institut の試験で C1 を取った者が 1 名，修士在学中に合格した者が 1 名出ています[4)]。

2.3. 話すことを基本とする

私たちの授業では，読み，書き，聴き，話す（spoken production, spoken interaction）の 4（5）技能を満遍なく訓練しますが，基本は音によるやり取りであると考えています。それはドイツ語が自然言語であり，（手話以外の）自然言語は音によってなり立っていると考えているからです。音から入り，十分に音になれた学習者は，読みの力もより自然に身につけることができると考えます。かなり早いうちからある程度の長文も目にして，selektives Lesen により，全体を大づかみに理解する力をつけていきます。日本語に翻訳することは一切しません。

私たちの授業では予習は前提としていません（予習が必要な時は明示的に指示します）ので，読みも聴きも初めてのテクストと取り組むことになります。それは，実際の生活を考えれば，当然のことでしょう。生活の中では，初見のものだらけですから，それに対応できる力をつけなければ生き抜いていくことはできません。学生は，グループワークで何も見ずに知恵を出し合いながら内容を把握していきます。もちろん，必要に応じて intensiv に読むことも必要となりますので，そのために辞書を引く訓練もします。また，今日では Google translation や DeepL のような機械翻訳

4）検定試験の受験は，強く勧めているわけではなく，あくまでも学生の自主性に任せています。従って，Goethe-Institut の試験を受ける者は極めて少数です。

ソフトを使うことは，基本的なリテラシーの一部分となりつつありますので，これらをいかに効果的に使うかということにも触れます[5)]。

書くことも最初期から重視しています。その際配慮しているのは，あるテーマについてそれぞれの学生が異なるアウトプットを出すような課題設定としているということです。例えば，Das Traumhaus というテーマであれば，各自が自分が理想とする家を写真と共に Moodle や Padlet に書きます[6)]。そして，他の学生はそれらを読み，コメントや改善提案を付けることを課題とすることによって，学習者の interaction が生まれます。このような書く行為で定着した表現などは，次に話す活動をする時の支えとなります。

このように，聴くことと読むこと，話すことと書くことは不可分の一体をなし，話し書くために聴き，読むということが不可欠のものであると考えています。

2.4. 文法，語彙，発音能力について

さて，このような言語活動を行うためには，文法，語彙，発音の能力が必要です。しかし，日本のドイツ語教育では，文法を重視するほどには，語彙や発音は重視してこなかったのではないでしょうか。

文法と言っても，初級の学校文法の教科書にあることのみが文法事項ではないことは誰でもが認めることでしょうし，ある意味では文法教科書に記載されたことは厳選された項目であると言えると思います。文法シラバスによって，初級文法を学び，講読能力を身につけるということは，明治期以来の西洋文物の移入に際して不可欠のものでしたし，また英独仏のそ

5）境，「やさしい日本語と機械翻訳による言語意識の向上について」．を参照のこと。

6）私たちの授業では，長年コンピューターのソフトも活用しています。2021 年度はすべて Zoom によるリアルタイムのオンライン授業でしたが，そこでは長年使っている LMS の Moodle や単語練習アプリ Quizlet の他に，Quizziz，Padlet，Flipgrid などを使いました。

れは高等教育における実需要を前提としたものでした。（実際，私が大学に入った1970年代には，人文科学はもとより，法学，社会科学だけでなく，化学や林学などでもドイツ語の論文を読むことは必須のことでした。理系でも，修士課程の入学試験に第二外国語がありました。）しかし，学問の英語化が進み，3・4年次のゼミナールでドイツ語で文献を読むことが（少なくとも経済学では）なくなった今日では，ほとんどの学部で学問的な実需要は喪失したといってよいでしょう。ここでは，大学における第二外国語の根本的なレゾンデートルについて語ることはしませんが（私個人は，複言語・複文化主義の立場から，この議論を長年行ってきました[7]），文法シラバスによって文法知識を得て訳読能力を着けることが今日的な課題であるかどうかは，真剣に問われる必要があるだろうとだけ言っておきたいと思います。

さて，今日まで多くの教員が暗黙の前提と考えてきた，「1年次で一通りの文法を学ぶ」ということは，一体何を意味するのでしょうか。文法教科書で文法を教え，学ぶことによって文法の力は身に着くでしょうか。私は，社会的知識構成主義の立場に立つ研究者であり教育者ですので，「文法を教えれば身に着く」とは考えません。これまで教員としてさまざまな学習者を見て，また言語教育研究・学習科学の成果を見ても，教えて学習者に移譲されるのはせいぜいが知識であり，その知識が力になるには，非常に多くの活動が必要であることはすでに明らかになっています。学習者が社会的エージェントして言語を用いて活動するためには，単なる知識が必要なのではなくて，力が必要なのです。この場合は，文法知ではなく，文法力が必要なのです。この力は，読み，書き，聴き，話すという活動を通して獲得され，そしてそれが語彙力，発音力と共にフィードバックされて，次の活動を支えるものとなるのです。そう考えると，ゼロ初心者の段階から，文法，語彙，発音能力の養成を視野に入れながら，読み，書き，

7）例えば，境，「日本の外国語教育の新たな姿を求めて：ヨーロッパの言語教育から学ぶ」．を参照のこと。

聴き，話す活動を中心に学習活動を展開することが必要不可欠であると考え，授業を行ってきました。

さて，発音教育に関しては，Halle-Wittenberg 大学の Ursula Hirschfeld 教授が *Phonothek* という著書その他で，「Grammatik, Lexik, Phonetik が言語学習という家を支える三本柱だが，コミュニカティブ・アプローチの台頭以来，前 2 者に対して，Phonetik が双子扱いにされてきた。それは，言語学習の中で音声的な間違いを訂正することが，学習者の発話の妨げになるので，それが避けられる傾向にあったからだ。しかし学習者の長期的成長を考えると，また目標言語社会における当該言語学習者に対する一般人の評価を考えると，Phonetik は決して軽視されてはならない。」と述べています。そして，「Phonetik は，必ずしも大きな学習項目として扱われる必要はないが，授業の中で少しずつ小出しにして訓練されるべきだ。」としています[8)]。私はこの考え方に共感し，授業の中で必要なだけ，継続的に Phonetik の訓練を行うようにしてきました。

さて，語彙力を身に着けるという点を考えると，私がドイツで出版された教科書をずっと用いてきた理由が明らかになると思います。毎年秋口から送られてくる，日本で出版されたドイツ語教科書を見ると，そのほとんどが語彙力を身に着ける課題に乏しく，私には非常に物足りなく感じられます。ドイツ製の教材は含まれる語彙が多すぎて扱いづらいと考える教員も多いと思いますが，私たちのように 1 年次に週 3 コマが与えられている場合，そして学習者のモティベーションが十分に喚起できる状況では，ドイツで出版された教科書の方が適していると考えています。

2.5. 授業言語について

ここで，授業言語についても述べておきましょう。

教員になってからの私は―Interuni-Seminar[9)] に教員として参加し，ド

8）以上は私が Hirschfeld 氏から直接伺ったことも含めて，まとめたものです。

9）1978 年から行われている，大学・専門分野横断的合宿制のドイツ語ゼミ

イツ語だけで行う授業を相当数こなしてきてはいましたが―必ずしも授業1言語主義の信奉者ではありませんでした。

しかし，日吉キャンパスで教え始めた1997年度，私はそれまで試したいと思っても踏み切れなかったことを試みました。それは，ゼロ初心者の授業である1年次の通常クラスの運営を，すべてドイツ語で行うということでした。教科書 *Themen neu* を使って週2コマを教えましたが，その結果は残念ながら期待していたようなものではありませんでした。三分の一の学生はまったく問題なかったのですが，三分の一の学生は授業方法にうまく適合できず，私の側から見ると「落ちこぼしてしまった」という強い悔いが残りました。かれらに単位を与えなかったというわけではないのですが，見ていて苦しそうだということがわかったのです。これを反省して，2年目からはドイツ語と日本語を適宜使い分けながら授業運営を行うようにして，今日にいたります。

日吉の1年生の初回授業は，パートナー教員と共に行いますが，90分の内の前半はドイツ語だけで行います。教員の自己紹介から初めて，学生に名前を言わせ出身の場所を尋ね，学生が相互に名前を聞いてサインを集めるという活動まで，一切日本語を使わずに行います。こうした活動が終わってから，教員がおもむろに「ぼくたちは日本語もできるんだよ」と言うと，学生が一斉にホッとするのがわかります。この後は，日本語を使って「ドイツ語圏クイズ」などを行うのが毎年恒例になっています。

授業では，質問のしかた，教員の指示などのドイツ語は最初期に導入し，一年を通して徐々に日本語を減らし，ドイツ語を多くしていくようにしています。このようにして，学生はドイツ語でドイツ語を学ぶということに慣れていくのです。

ナール。春休みには主に学部生を対象とした初心者向け，夏休みには3・4年生から大学院生を対象とした上級者向けのゼミナールが行われている。

2.6. 試験について

1 年生の未習クラスのテストについても書いておきましょう。

それぞれの課が終わるごとに実施する小テストは Moodle で行いますが，春学期末，秋学期末の試験は，以下のように行っています。

・補講日の 2 コマを使い，180 分で行う。
・小テストが授業中に済んでいない課の試験は，Moodle で行う。
・聴き取りは教員が文章を読み上げ（課題によってはビデオを使うこともある），それに対する答えは Moodle の小テスト機能を使って回答する。春学期は四則演算の聴き取りも含む。
・基本的な発音，朗読課題の録音は，コンピューターの録音機能を使って行う。（2021 年度はオンライン授業だったので，Flipgrid を使った。）
・読解，作文などの問題は紙媒体を用いて行う。（2021 年度は Word ファイルを配布して，それに書き込ませ回収した。）
・パフォーマンス課題：春学期末は，ペアごとに短いスキットを作り，それを全員の前で演じる。秋学期末は，冬休みに行ったことを個人で報告する。その際，レアリアや写真を見せたり，PowerPoint を使うことも許可する（教員は録画する）。

2.7. LMS やオンラインソフトについて

コロナ禍が急速な拡大を見せた 2020 年度は，私自身は特別研究期間でしたので，授業がありませんでした。2021 年度はパンデミックが続いていましたので，私たちの担当授業はすべて Zoom によるオンライン授業としました。一部の授業を対面で行う可能性もあったのですが，グループワークを基本とする私たちの授業では，社会的距離を取るために大教室で離ればなれに座ると，うまく行かないだろうという懸念があったからです。元々対面授業でも，日吉第 3 校舎の CALL 教室を使い，常にコンピューターをオンにしながら，LMS やさまざまなオンライン・リソースを授業中に使ってきましたので，対面授業としても各自がオンライン環境を作ら

なければならず，それよりも Zoom で授業を行った方が良いと判断したのです。その結果は，特に大きな問題もなく，これまでの対面授業と類似の環境を作り出すことができ，スムーズで実効の上がる授業運営ができたと感じています[10)]。

すでに述べたように，LMS としては長年 Moodle を使ってきました。そのモジュールの一つである Forum を使って，学習者は毎回振り返りを書き込み（これに対して，教員は必ず返信をします），ライティングの課題を提出するということも行ってきました（2021 年度は，書く課題は主に Padlet で行いました）。それらは，全員が見ることができますから，クラスメイトが書いたものを読んでリプライをつけるなどの活動も行います。また，小テストもすべて Moodle で行っています。学習上必要な情報を提供し，オンライン辞書などにリンクを張るなど，これがなくては授業ができないと思うほど，活用しています。

そもそも，Computer Assisted Language Learning（CALL）には，前任校の成蹊大学にいた時から関心を持ち，研究対象としてきました。前任校では，CALL 教室を 2 教室作る活動に参加したことがきっかけで，その後長い間私のメインの研究領域となりました。

その経験は，日吉に移ってからも，語学視聴覚教育研究室（2002 年に外国語教育研究センターに改組）での活動の基礎となりました。1999 年に日吉第 3 校舎 334 番教室を CALL 教室に改装する際には，全国の高校・大学の CALL 教室を数多く見学し（合計すると 10 校以上になるでしょう），自分たちに最も適した設備はどういうものかを同僚と議論しました。その結果，グループワークがやりやすく，コンピューターが学習活動の邪魔にならない（机を組み替えてさまざまなレイアウトを取ることができ，コンピューターが必要ない時はしまえる）部屋を作ることで合意しました。その考えを元にして，その後第 3 校舎 2 階の CALL 教室も作っていきました。

10）境，「オンライン授業の可能性について―コロナ禍状況での実践を振り返って―」．を参照のこと。

3. その他の経済学部 1 年生の授業

3.1. 既習者クラス

さて，1 年生のその他の授業についても記しておきましょう。

まず，既習者クラスですが，教材は決まっていません。しかし，大体は簡単な時事的文章を扱います。教科書を使うときもありましたが，近年は大体インターネットのやさしい新聞のニュースなどを使っています。なるべく音源があるものを用いて，朗読の練習もするようにしています。

基本的には日本語訳は行わず，読解は教員との質疑応答によって進めていきます。ゼロ初心者ではないので，すでに日本語で学習する習慣がついていますので，こうしたクラスでは日本語を基本的な授業言語としています。

3.2. PEARL 生クラス

2017 年度から，経済学部では 1 学年 1200 人の内，100 名を対象に PEARL というコースを導入しました。そこでは，基本的に全ての授業が英語で行われます。適用される学則は従前通りですから，第二外国語も 1 年次には 3 コマが配当されています。このクラスの授業言語をどうするか話し合った際，私は目標言語で行うことを認めるよう主張し，それが受け入れられました。最初の学期は私も提案者である責任もあり，ベルリン育ちのアイルランド人である David McCoy さんと一緒に担当しました。教材は *Schritte international* としました。基本的にはドイツ語で進めるのですが，英語を補助言語とし，学生からの質問が英語の場合は英語で対応することになりました。

このクラスで驚いたことは，はじめの内はこちらが準備していた以上に進度が速くなったことです。特に聴き取りは，他のクラスでは音源を繰り返し聴く必要がある課題も，大体は 1 回で済んでしまうのです。TOEFL が 100 点を超える英語力を持つ学生ばかりなので，ヨーロッパ語の音の

聞き分けや談話構成にも慣れていて，聴き取りの勘所がわかっているのだなと感じました。既存の言語体験（とそれによる言語能力）が新しい言語を学ぶ際に有利に働くのを目の当たりにして，ヨーロッパ人のヨーロッパ語学習はこうなのだろうと思わされたことです。

4. 経済学部 2 年生

4.1. 一般クラス

2 年生の一般クラスでは，講読の授業を行ったこともありますが，大体はパフォーマンスを主体とした授業を行ってきました。ビデオ作成も多く行ったことの一つです。その場合，テーマを決めて，短いビデオ作りからだんだんと長いものを作っていきます。すべてグループワークです。「慶應大学の授業を紹介する」というテーマの時は，1 学期の大部分をかけました。授業ではシナリオ作りと添削が繰り返され，それが済むと，学生は撮影に出かけました。編集は得意不得意がありますので，役割分担は学生が自分たちで決めました。成果は YouTube に非公開でアップして，学生間では共有できるようにしました。

4.2. 既習 2 年生

既習クラスの 2 年生では，基本的にニュース記事の講読を行ってきました。素材は，ほとんどの場合インターネットから取りました。2021 年度は，leichte Sprache「やさしいドイツ語」で書かれたサイトの中でも，もっとも簡単なドイツ語から徐々に難度を上げて [11]，最後の方にはそれなりの難かしいものが読めるようになりました。

テキストは初見のものを予習なしで読みます。基本的には学生同士がグループワークで読み解き，それを見ながら教員は適宜ヒントを与えます。既存の知識を基に推測するということを最重視します。段落ごとにある程

11）例えばこのようなサイトを用いた。https://www.nachrichtenleicht.de/（2022/01/15 確認）

度読み取ったところで，この単語の意味がわかったらより意味が正確に取れると学生が判断した単語を二，三出させ，それに対しては辞書で調べることを認めます。その繰り返しで，学生はかなり正確に意味が取れるようになります。

また，段落ごと，もしくは記事全体の中からキーワードをメモさせ，それを使って自分たちの言葉で記事を再構成するということも教えます。まずは日本語で行って，それを今度はドイツ語でという順番で進めたいのですが，やはり 2 年生ではなかなかそこまではうまくいきません。

宿題は，毎回 1 ～ 2 段落を朗読して録音させるということをしています。2021 年度は Flipgrid を用い録画させました。これを使うと，音声だけでなく，発音している顔がよく見えるので，発音指導がやりやすくなります。

5. 経済学部 3 年生以上

3・4 年次の授業は，選択となります。かつては，1・2 年次に既習クラスにいたものは，3 年以上でも必ず履修を継続するようにという学習指導がなされていましたが，現在ではそうなっていません。

かつて既習クラス上がりの 3 年生にはドイツ語力の高い者が多かったので，教材もそれに相応したものを選びました。ある年度は Weizsäcker 大統領の演説集を使ったことを記憶しています。その時には，毎回パラグラフごとのディクテーションを行いました。また，2 ～ 3 人に前に出てもらって，暗記したパラグラフをそこで Weizsäcker になりきって語るということもやってもらいました。その時，群を抜いて優秀なコピーをしてきたのが現在学習院大学ドイツ語圏文化学科で教えている小林和貴子さんでした。彼女は，テープを聞き込んで準備をしてきたのでしょう，Weizsäcker の演説の速度，ポーズの位置，抑揚までもすべて完璧に再現して，舌を巻きました。

5.1. ドイツ語だけで行う講読授業

さて，もう 10 年以上前になるでしょうか，ある年の 3・4 年生向け授業の初回で，学生が「せっかく境さんの授業なんだから，全部ドイツ語でやってください」と提案してきました。その授業には，1 年次に私たちの授業を取った者以外も参加していましたので，ドイツ語で行う授業に抵抗がないか恐る恐る尋ねると，かまわないと言うのです。そこで，提案を受け入れて（雑談以外は）すべてドイツ語で行うという授業を開始しました。それがその後ずっと続くことになります。

この授業では，Deutsch Welle のサイト Deutsch lernen の THEMEN[12] というコーナーからビデオ教材を取りました。大体は B2 レベルのものですが，中には C1 程度のものを使うこともありました。学生の発話能力はばらつきがありましたので，発言を強要はしませんでしたが，内容の解説，文法の説明など，かなり高度なこともすべてドイツ語で行いました。毎年，1 ～ 2 名は発話能力も高く積極的な学生がいましたので，クラスを引っ張っていってくれました。残念ながら学生同士がドイツ語で議論することまではできませんでしたが，少なくともやる気のある学生が相当に難しいテキストに取り組んでくれたのはうれしいことでした。

他のクラスと同様に，単に読むだけでなく，テクストの朗読にもかなりのエネルギーを注ぎました。

6. 外国語教育研究センターの授業

2002 年に発足した外国語教育研究センターでは，（2002 年度は留学で不在でしたので）2003 年から今日にいたるまで，ずっと「ドイツ語表現技法Ⅰ」を担当し，音声教育を行ってきました。学部の授業で，一番欠けているのが音声教育であると感じたので，それを補おうと始めたものです。

受講者はさまざまな学部から，毎年 5 ～ 6 人から多いときで 12 ～ 13 人ほどが集まりました。理工学部からも毎年熱心な学生が来てくれたのが

12）https://www.dw.com/de/themen/s-9077（2022/01/15 確認）

印象に残っています。まったくの初心者も可としましたので，学部の第二外国語ではドイツ語以外を履修し，そのクラスが初めてのドイツ語であるという学生もいました。履修案内で，この授業を取るとドイツ語だけでなく，英語や他の言語の発音も良くなると謳っていたので，それに釣られて来た学生もいたと思います。

教材には，かつて私が三修社の『基礎ドイツ語』で連載した発音に関する記事をWeb化したものを使いました[13]。調音器官の観察から始め，ヨーロッパ語で用いる代表的な音だけでなく，比較音声学的な観点も取り入れて，日本語の音も意識的に観察・練習しました。筋肉や骨の動きを観察することは常に意識をしてもらいました。日本語についても，例えば「ハ行音」には何種類の子音が含まれているかなど，普段意識をしない音の違いにも意識を向けるようにしました。時には，日本人のビデオ（ニュースなど）を見て，発音の特徴を挙げてもらい，それがどの方言に由来するかなども議論しました。

春学期には，単音の発音と聴き取りから始めて，パラグラフが正確かつスムーズに発音できるまで練習します。その際，特に西ゲルマン語の特徴である stress-timed language / akzentzählende Sprache についての英語のビデオ[14]を見て，発音を観察するということも行いました。suprasegmental な要素を重視することによって，スムーズで聴き取りやすい発音をするということに重点を置いた練習をしました。

また，子どもの Vers から始めて，童謡などの聴き取り，発音練習を行い，ドイツ語の基本的特徴を摑むという訓練も織り交ぜています。

聴き取りでは，b / w，l / r の聞き分けの練習もミニマル・ペアを使って継続的に行っています。

秋学期は，基本的な練習以外に，戯曲の読み合わせを行います。初年度

13）http://web.econ.keio.ac.jp/staff/sakai/hu/（2022/01/15 確認）

14）例えば，https://www.youtube.com/watch?v=sUMM5eCvi8w&t=7s など。（2022/01/15 確認）

から今日にいたるまで，題材としては B. Brecht の *Jasager* を使っています。この戯曲はドイツの生徒用に書かれたものながら，音に出すとやはりドイツ語の質の高さと深さが感じられるものです。テキストには似た表現が繰り返し出てくるので，ある程度進むと意味の読み取りが簡単になるというメリットもあります。ペアワークやグループワークで繰り返し繰り返し練習を重ね，最終授業では何組かに分かれて発表を行い，ビデオ撮りするというのが毎年の流れです。

7. 終わりに

このように振り返ると，私の授業の内容は，教育者としての私が一番関心を持ってきた Language Awareness と Learning Awareness を涵養するということを常に意識していたことが改めてわかります。ドイツ語学習という範囲を越えて，学生たちが社会人となっても，自律的な言語学習者として，必要な時にいつでも新たな言語を学ぶことができる人を育てたい，という私の「ねがい」が反映しているのだと思います。

以上のように，日吉キャンパスでは，教員として自由に思う存分授業を行うことができました。これも，同僚が互いの考えを尊重し，それぞれが己の考えるところに従って授業を行うことを許してくれる土壌があったからだと思います。このような環境に 25 年にわたって身を置き，ドイツ語を教えることができたことをとてもありがたく思い，感謝せずにはいられません。本当にありがとうございました。

文献

Council of Europe. *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment.* 2001.

Dallapiazza Rosa-Maria et al. *Tangram : Deutsch als Fremdsprache.* 2. Aufl. Max Hueber, 2002.

Evans Sandra et al. *Menschen : Deutsch als Fremdsprache.* Hueber, 2012.

Jones Alan G., Aufderstraße Hartmut & Bock Heiko. *Themen neu : Lehrwerk für Deutsch als Fremdsprache.* 3. Aufl. M. Hueber, 1994.

Niebisch Daniela et al. *Schritte international : Deutsch als Fremdsprache.* 1. Aufl. Max Hueber, 2006.

Stock Eberhard & Hirschfeld Ursula. *Phonothek : Deutsch als Fremdsprache.* Langenscheidt, 1996.

境一三.「オンライン授業の可能性について―コロナ禍状況での実践を振り返って―. ドイツ語教育，no. 25，2021 年，13–24.

―――.「やさしい日本語と機械翻訳による言語意識の向上について」. ドイツ文学，2021 年，147–60.

―――.「日本の外国語教育の新たな姿を求めて：ヨーロッパの言語教育から学ぶ」.『ことばを教える・ことばを学ぶ：複言語・複文化・ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）と言語教育』. 行路社，2018 年，149–70.